



TITLE:

京大広報 No. 544

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 544. 京大広報 2000, 544: 831-842

ISSUE DATE:

2000-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196566>

RIGHT:



京大広報

No. 544

2000. 3



平成12年度入学試験（前期）

目次

大学の動き

平成12年度入学者選抜学力試験の 第1段階選抜状況	832
博士学位授与式	833
人権に関する研修会の開催	833

部局の動き

農学研究科附属演習林白浜試験地 返還記念式典・記念講演・記念パーティー	833
日誌	834
訃報	835

随想

細胞ストレスとシャペロン 名誉教授 由良 隆	835
哲学は自然科学を学ぶために有用であるか 名誉教授 若野省己	836

洛書

本学の自由な学問風土はいずこへ 八田夏夫	838
カオスの波紋 久野英二	839

資料

平成11年度教育実習実施状況	840
----------------------	-----

話題

クラブ紹介 - アイスホッケー部 -	841
--------------------------	-----

お知らせ

全学共通科目電子掲示板情報の インターネットでの閲覧について	842
---	-----

大学の動き

平成12年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜状況

平成12年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜が行われ、2月12日(土)、志願者に通知された。学部別の合格者数は次表のとおりである。

学 部			募 集 人 員	志 願 者 数	志 願 倍 率	第 1 段 階 選 抜		第 1 段階選抜 の 予 告 倍 率	
						合 格 者 数	倍 率		
総 合 人 間 学 部		前 期	人	人	倍	人	倍	—	
		文 系	110	461	4.2	451	4.1	—	
			55	224	4.1	220	4.0	(注 1)	
		理 系	55	237	4.3	231	4.2	(注 1)	
文 学 部		後 期	20	379	19.0	320	16.0	約12.0倍	
		前 期	190	629	3.3	629	3.3	約 3.5倍	
教 育 学 部		後 期	30	412	13.7	301	10.0	約 5.0倍	
		前 期	40	165	4.1	160	4.0	約 3.5倍	
法 学 部		後 期	20	168	8.4	145	7.3	約 5.0倍	
		前 期	320	838	2.6	838	2.6	約 3.5倍	
経 済 学 部		後 期	20	471	23.6	341	17.1	約 8.0倍	
		一 般 論 文	前 期	210	897	4.3	897	4.3	—
			160	619	3.9	619	3.9	約 3.5倍	
			50	278	5.6	278	5.6	約 5.0倍	
理 学 部		後 期	20	676	33.8	676	33.8	約 7.0倍	
		前 期	271	968	3.6	949	3.5	(注 1)	
医 学 部		後 期	30	1,062	35.4	1,038	34.6	(注 2)	
		前 期	90	481	5.3	421	4.7	約 4.0倍	
薬 学 部		後 期	10	264	26.4	151	15.1	約10.0倍	
		前 期	70	193	2.8	193	2.8	約 3.5倍	
工 学 部		後 期	10	133	13.3	133	13.3	約10.0倍	
		前 期	874	2,481	2.8	2,480	2.8	約 3.0倍	
	地 球 工 学 科	後 期	101	1,335	13.2	1,285	12.7	—	
		前 期	175	479	2.7	479	2.7	—	
	建 築 学 科	後 期	20	358	17.9	358	17.9	(注 3)	
		前 期	80	238	3.0	237	3.0	—	
		後 期	10	122	12.2	81	8.1	—	
		A 選 抜	5	55	11.0	50	10.0	約 8.0倍	
		B 選 抜	5	67	13.4	31	6.2	約 6.0倍	
	物 理 工 学 科	前 期	211	640	3.0	640	3.0	—	
		後 期	24	410	17.1	410	17.1	(注 3)	
	電 気 電 子 工 学 科	前 期	117	308	2.6	308	2.6	—	
		後 期	13	217	16.7	217	16.7	(注 3)	
	情 報 学 科	前 期	81	215	2.7	215	2.7	—	
		後 期	9	81	9.0	72	8.0	約 8.0倍	
	工 業 化 学 科	前 期	210	601	2.9	601	2.9	—	
後 期		25	147	5.9	147	5.9	約 6.0倍		
農 学 部		前 期	240	751	3.1	751	3.1	約 3.5倍	
		後 期	60	807	13.5	807	13.5	約10.0倍	
合 計			2,736	13,571	5.0	12,966	4.7	—	
			前 期	2,415	7,864	3.3	7,769	3.2	—
			後 期	321	5,707	17.8	5,197	16.2	—

(注1) 総合人間学部前期及び理学部前期は、大学入試センター試験の5教科6科目の合計得点が800点満点中550点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

(注2) 理学部後期は、大学入試センター試験の3教科3科目の合計得点が500点満点中300点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

(注3) 工学部後期の地球工学科・物理工学科・電気電子工学科は、3学科後期募集人員の合計の約12.0倍とする。

(注4) 下記外国学校出身者のための選考合格者が募集人員に満たない場合には、その数を法学部(後期)20人、経済学部(後期)20人の募集人員に加える。

〔外国学校出身者のための第1次選考実施状況(外数)〕

学 部 名	募 集 人 員	志 願 者 数 (倍 率)	第 1 次 選 考 合 格 者 (倍 率)
法 学 部	20人	47人 (2.4倍)	28人 (1.4倍)
経 済 学 部	10人	33人 (3.3倍)	18人 (1.8倍)

博士学位授与式

1月26日(水)午前10時30分から、京大会館において、長尾 真総長、両副学長をはじめ、各研究科長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記(平成11年11月24日付、同12年1月24日付)が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時45分終了した。

各研究科別内訳は次のとおりである。

研 究 科	平成11年11月			平成12年 1 月		
	課程 博士	論文 博士	計	課程 博士	論文 博士	計
文 学 研 究 科	2	1	3	3	7	10
教 育 学 研 究 科	1	-	1	-	1	1
法 学 研 究 科	1	1	2	1	-	1
経 済 学 研 究 科	2	1	3	2	1	3
理 学 研 究 科	10	1	11	4	6	10
医 学 研 究 科	9	1	10	6	3	9
薬 学 研 究 科	-	2	2	-	5	5
工 学 研 究 科	2	7	9	2	13	15
農 学 研 究 科	-	12	12	3	12	15
人間・環境学研究科	-	-	-	1	-	1
エネルギー科学研究科	-	1	1	-	2	2
情報学研究科	-	-	-	2	-	2
計	27	27	54	24	50	74

人権に関する研修会の開催

1月31日(月)午後3時から、附属図書館(3階)A Vホールにおいて、人権に関する研修会が開催された。

本研修会は、学内外から講師を迎えて本学教職員を対象として同和・人権問題の啓発を図る目的で、毎年、春秋の2回開催されており、今回は山崎高哉大学院教育学研究科教授を講師に迎え、「民族教育の必要性と課題」というテーマで講演を行った。

この研修会には、宮崎 昭副学長及び渡邊 尚同和・人権問題委員会委員長のほか教職員約100人が出席し、熱心に聴講した。



部局の動き

農学研究科附属演習林白浜試験地返還記念式典・記念講演・記念パーティー

京都大学は明治42(1909)年に台湾に演習林を設置し、附属演習林が発足した。その後、海外に2演習林が設置されたが、終戦とともに海外の全演習林を失い、戦後、これらの代替地を求めた。そのひとつが白浜試験地に当たる。

白浜試験地は、昭和25(1950)年2月和歌山県西牟婁郡白浜町の高屋氏の山林、また、翌26年2月白浜町有林に、50年間の契約で地上権を設定した。合わせて70ヘクタールほどの面積である。設定当時の林

況は、尾根にアカマツが母樹として残っていたものの、コナラ、ウバメガシなどからなる低木の二次林であり、低地にはウラジロシダ、ケネザサが多く、丘陵地にはコシダが密生していたと記録されている。試験地全域の基岩は第三紀層の硬い砂岩からなり、借地前には砥石用石材採取場があり現在跡地が林内に残されている。このような山林を開墾して苗畑、歩道を造成し、事務所を建設して、試験地の基礎が出来上がった。試験地の方向づけは当初より20年に

わたり、白浜試験地に大きく関わられた柴田信男先生のご努力による。

初期の目標は台湾演習林での試験研究を引き継ぐことにあったが、白浜の冬季の温度が低く、マラリアの特効薬としてのキナの栽培は無理であった。その後シナアブラギリ、タンニンアカシアなどの特用樹、パルプ材としてのアカシア、ユ・カリ、外国産マツなどの育成が試みられた。しかし、戦後の急激な社会変化によって、特用樹の価値が変わり、販売できない状況となった。

土地が痩せた条件下にあり、経済林の造成には不適な土壌条件であったので、痩せ地での森林造成の試験研究が行われた。この一方法として肥料木であるマメ科植物のアカシアを先に育て、その跡地に経済林を育てる方法が採られ、結果としてヒノキ林、スギ林等が造成された。他方、苗畑に肥料を施す試験研究が行われ、生産した苗木を、山林に植栽した。

演習林は海外の大学や植物園と樹木の種子を交換しあうシステムに加入しており、痩せ地に育つユ・カリ、アカシア類を育てた結果、外国産樹木、特にオーストラリア原産の多くの樹木を育てる場所として白浜試験地が国内で有名となり、これらの種類を収集し、園芸的に寄与する試験研究が生まれた。また開花した樹木の多数は樹木図鑑、新聞等に掲載されてきた。

白浜試験地では熱帯林を除く、世界各地の樹木、2,000種以上を導入し、成功や失敗を記録してきた。その結果は、外国産樹木の導入上の問題点の解明や世界の森を日本に紹介する役割を担ってきた。

この50年間に白浜試験地に関連する報告書、論文等約130編が発表され、試験地に関係した学生、教官から、マツ枯れ、熱帯林、乾燥地林の専門家が多

数生まれ、現在、主に海外で活躍中である。

白浜試験地の地上権契約は、本年1月31日をもって満了した。農学研究科附属演習林では1月30日(日)午前11時30分から、和歌山県西牟婁郡白浜町のコガノイ ベイ ホテルにおいて学内外からの関係者約60人が出席して地上権返還の記念式典を行った。



式典では、はじめに渡辺弘之農学研究科附属演習林長が挨拶し、長尾 真総長のお礼の言葉があり、土地所有者の多屋平夫多屋林業会長、真鍋清兵衛白浜町長の挨拶、松野隆一農学研究科長の挨拶の後、長尾総長から土地所有者へ感謝状の贈呈が行われた。

続いて、12時10分より、大畠誠一附属演習林教授による「白浜試験地で行われた試験研究とその役割」と題する記念講演が行われ、上中幸治元技官による試験地で育成した樹木のスライド映写と説明が行われ13時30分に終了した。

その後、同ホテルにおいて記念パーティーが行われ和やかに歓談し、盛況のうちに幕を閉じた。

(大学院農学研究科附属演習林)

日誌

2000.1.1~1.31

1月4日 新年名刺交換会
15日 大学入試センター試験(16日まで)
19日 国際交流委員会
21日 同和・人権問題委員会
25日 評議会

26日 博士学位授与式
" 環境保全委員会
31日 附属図書館商議会
" 人権に関する研修会

訃報

このたび、井深俊郎^{いぶかとしろう}大学院薬学研究科教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介します。

井深 俊郎 薬学研究科教授



薬学研究科教授井深俊郎先生は、平成12年1月20日逝去された。享年63。

先生は、昭和35年岐阜薬科大学を卒業、本学大学院薬学研究科修士課程、博士課程修了後、同薬学部助手に採用され、同講師、同助教授を経て、平成8年同教授に就任し、平成9年より同大学院薬学研究科創薬科学専攻薬品分子化学分野を担当された。平成10年から評議員を務められ、本学の管理運営に貢献された。

先生は、民間薬として使用されていたハスノハカズラから新規なアルカロイド類を単離し、その構造研究を行うとともに、ハスパナンアルカロイド類や

矢毒蛙アルカロイド等の全合成を世界に先駆けて行うなど、動植物の化学成分の構造研究ならびに合成研究において顕著な業績を挙げられた。また、有機銅試薬等を有機合成反応に利用し、数多くの興味深い化学的性質を明らかにするとともに、それらを用いて種々の含窒素化合物やアルケン・ジペプチドイソスターなどの高選択的な合成法を確立するなど、有機金属試薬の合成化学的な有用性を立証する先駆的な研究を展開された。

主な著書に『Organocopper Reagents in Organic Synthesis』、『Organocopper Chemistry』(共著)、『The Alkaloids』(共著)等がある。

(大学院薬学研究科)

随想

細胞ストレスとシャペロン

名誉教授 由良 隆

21世紀は生命と環境の世紀と言われるが、まさしく昨今は遺伝子やDNAの話題が沸騰してきた感がある。一方、ストレスの時代でもある現代において、人間のみでなく、あらゆる動植物、微生物の細胞にも共通のストレス反応(応答機構)が見られるという事実は、研究の歴史もまだ浅く、余り一般に知られていない。この小文の題目は、去年私の周辺で発足したばかりの国際細胞ストレス学会の機関誌のタイトルである。

1975年頃、私達はウイルス研究所で細菌の“熱ショック応答”とその主要な制御因子を見つけたのをきっかけに、細胞がどのようなメカニズムでストレ



スに応答するかを研究してきた。同様の研究は、高等動植物でも盛んに行われ、蛋白質化学の研究者も巻き込んで、ここ10年間ほどで予想以上の発展を遂げ、今や生命科学の主要課題の一つになった。

熱ショック応答(ストレス応答)とは、生物の細胞、器官、個体などを急に高温などのストレスにさらした時、ストレスによる損傷を修復し生体を防御するように働く反応をいう。その中心的な反応として、進化的によく保存された一群の“ストレス蛋白質”の合成が顕著に促進される。主なストレス蛋白質には分子シャペロンと蛋白質分解酵素があって、それぞれストレスにより傷ついた(部分的に変性した)蛋白質を、保護・修復または分解して取り除く働きをし、生命活動の維持に極めて重要な役割を果たす。

一般に蛋白質（酵素など）に固有のアミノ酸配列は、遺伝子（DNA）の塩基配列によって決まり、その情報を解読（翻訳）することによって作られる。そして分子シャペロンの介添えによって細胞内の各々の場所に運ばれ、そこで正しく折り畳まれて、初めて機能を発揮することが出来る。シャペロンは、多種多様な蛋白質が高濃度で混在する細胞内で、効率よくそれらの過程を進めるために欠かせない。従って、その活動が低下すると、ストレスにより傷ついた蛋白質や新しく作られたばかりで未成熟の蛋白質は、互いに誤った会合を繰り返し、不溶性の塊を作るようになる。つまり正しい折り畳みに失敗すると、普段は重要な蛋白質も役立たないばかりか、しばしば細胞にとって厄介で危険なものになる。このようにストレス状態では勿論のこと、平常時でも大切な働きをするストレス蛋白質を、“シャペロン” としゃれた名で呼ぶ。それは、若い未婚女性が社交界に出るときに介添え役をする年配の婦人にたとえたものである。

さて、組み換え遺伝子を大腸菌体内で発現させて、その産物である異種蛋白質を作らせることは、広く行われているが、実際には余りうまく行かないことが多い。それは、主として正しい折り畳みが難しいためで、いわば大腸菌の示す拒絶反応のようなものだ。このことは、酵素やワクチンのように有用な蛋白質を大量に生産しようとする時には避けて通れな

い問題であるが、ここでシャペロンが威力を発揮することが考えられる。

さらに人間や動植物の生命維持に重要な蛋白質がストレスや病気によって機能不全に陥った場合、シャペロンを補強または抑制することによって治療したり、再発を防ぐことも将来は可能になるだろう。実際に培養細胞を使った実験では、そのような効果が期待される。

このように分子シャペロンの応用は、バイオ関係の色々な分野で多角的に検討する価値がありそうだ。その様な期待もあって、停年退官後、官民共同出資の研究所で基礎と応用にまたがる研究を続けることが出来たのは幸いであった。お蔭で多少なりとも、関連分野の発展に貢献出来たかと思う。

振り返れば、京大農学部（遺伝学教室）を出て間もなく渡米し、分子生物学の揺籃期を現場米国で体験して、ウイルス研究所に戻って以来40年になる。25年前の偶然の発見に始まり、初期には殆ど注目されなかった細菌の熱ショック応答の研究も、国内外の多くの研究者らの支援を得て、京都の地で開花させることが出来た。さらに会社組織で自由闊達な研究環境が作れるかどうか不安であったが、諸条件に恵まれ、また周囲の支援によって、研究に専念できた7年間だったことを感謝している。

（ゆら たかし 元ウイルス研究所教授 平成5年退官、専門は分子生物学、微生物遺伝学）

哲学は自然科学を学ぶために有用であるか

名誉教授 若野 省己

私は京都大学理学部に在学中、2つの単位を落とした。その1つは秋月康夫先生の代数学である。私は理論物理学を専攻していたが、代数学は推薦科目の1つになっていた。クラスの中には数学の広中平祐先生も入っていたが我々物理の学生にとっては、それは極めて難しい内容のものであった。時が経つにつれて、物理の仲間はクラスから姿を消して行っ



た。ノートを読み返しても意味がよく分からないので、秋月康夫、鈴木通夫著、『高等代数学Ⅰ』を必死に読んで試験に臨んだが全く歯が立たなかった。朝永振一郎氏の論文には、平易な数学を使って物理的な描像が明らかになるような工夫が凝らされているように思えるが、氏の随筆集、『庭にくる鳥』には、次のような一節がある。「しかし、この退屈な教室のなかにとときどきふき込んで人々をいきかえらせる冷風のように、新鮮な空気のただよう時間もあった。それは岡潔先生と秋月康夫先生の数学の時間

であった。」代数学の中でも、とりわけ、群論がその後の研究生活において、しばしば、私を悩ませたことから考えて、比較的多くの時間を割ける教養課程にこの科目が組み込まれておいたら、と残念に思う。勿論、群論的な方法が物理学の本質とどれだけ深い関係を持つかについては、私自身、疑問を抱いていることは確かであるが。

その頃の理論物理学を専攻する学生は、殆どすべて、大学在学中に教育職員になる資格を取得していた。教職科目の1つに沢潟久敬先生の自然科学概論が含まれていた。Princeton 大学への留学中に実家が全焼して先生の講義ノートが残っていないため、私は現在その内容を思い出すすべを持たない。しかし、私は先生の試験問題、「哲学は自然科学を学ぶために有用であるか」をその前夜に予知し、色々と解答を模索したが講義ノートから先生の意図しておられるものを掴むことが出来なかった。内容を理解せずに試験問題を予知したことは、現在の私には不思議に思えるのであるが、考えあぐねた末、「哲学は自然科学の論理的思索に有用である」という主旨の答案を書いて、見事に私は自然科学概論の単位を落とした。教養課程のときには、辻村公一先生の哲学の講義は、井草準一先生の数学の講義とともに私にとって最も充実した時間であったが、私は今日に至るまで哲学について勉強をしたことはない。しかし、40年を超える長い間物理学の研究が続けているが、「お前の仕事は哲学を必要とする水準に達して

いない」という囁きが耳元を離れなかった。山崎和夫教授によると（物理学教室談話会）、Heisenberg は彼の先生である Sommerfeld に「私は哲学を必要とする物理学を研究したい」と申し出て、卓抜な数学力を駆使して輝かしい業績を挙げた Sommerfeld を驚愕させたと言われる。

物理学の進歩の歴史を振り返るとき、近代科学の祖と言われる Galilei による「落体の法則」から「Galilei の慣性の法則」に至るまでには、「命題」、「証明」などという論理形式でなく、推論・仮説・実証による典型的な物理学の発展の姿を見ることが出来る。現在について考えてみよう。Weinberg は、「Dreams of a Final Theory」（究極理論への夢）の中で次のように述べている。「私にとっては、還元主義は研究計画をたてるときの指針ではなく、自然そのものに向かうときの態度なのである。ある科学原理がある形をとる理由は、それより深い科学原理（それと場合によっては歴史的偶然）にあることを認め、そしてこれらすべての科学原理の源をたどっていくと、たがいに連結したいくつかの法則の集まりに達し得ることを認める - これが還元主義であってそれ以上でも以下でもない。」ここにもやはり、「論理」と論理を超えるもの、「発想のメカニズム」とが混在し、それが実証によって確かなものになっていく過程が存在しているように思われる。

（わかの まさみ 元総合人間学部教授 平成6年退官、専門は素粒子論）

洛書

本学の自由な学問風土はいずこへ

八田 夏夫

最近、京都大学がなんとなくざわついているように思う。この大学の特徴である自由な学問風土が何処かへ行ってしまっているのではないか。そのように感ずるようになったのは、どうも大学設置基準の大綱化に準じて大学院重点化による大学改組が始まってからのように思う。学部は大学科制に移行し、教官は大学院所属となった。特に好ましい姿とは思わないが、これで暫く落ち着くのかなと思ったら、つぎつぎと新研究科が誕生している。それも組織だけが作られ、新研究科の建物は何も用意されていない。新研究科に所属する教官や学生は吉田キャンパスや宇治キャンパスなどに分散している場合があり、会議や講義には大変な苦勞を強いられていると聞く。

そのような状況の中で、今や、吉田キャンパスは建築ラッシュである。とはいっても、新研究科の教官や学生が入居できるわけではない。8階建ての高層建築物が新装されて入居が終われば、次期の建築が始まる。そうこうしていると、平成11年度の第二次補正予算で本学の新キャンパスが桂坂に確保できたと聞く。ある新聞記事によると、これはわが国経済の景気浮揚策の一環であるらしい。大学院重点化による大学改組、吉田キャンパス内の建築ラッシュ、そして新キャンパスの取得、これらがここ数年の短期間に集中して起こった。そのためか、京都大学の落ち着いた自由な教育・研究の雰囲気は全く感じられない。一体、つぎに何が起こるのか。国立大学の独立行政法人化であろう。

この独立法人化は、大学自身による要請からではなく、公務員の定員削減を目的とする国の政策上の要請から生まれたものである。この問題に詳しくはないが、国立大学が法人化されると、文部科学相が各法人に対して3年から5年の中期計画を指示し、その達成度を第三者評価委員会が査定する。その結

果によって法人の予算・定員配分が決められ、あるいは教育・研究の効率を上げるために、その法人は改組の勧告を受ける。ということになると、学問風土の自由を標榜してきた本学は、その主義・主張を失うことに帰する。もちろん、法人化されても国から予算が入るし、企業にメリットのある研究に対しては企業資金が入ってくる。当初は、総研究費が増加するかもわからないが、やがて国からの予算の減額を促すことになりかねない。要は、国立大学法人化の狙いは、少ない予算で、教育・研究の効率を高めるとのことらしい。しかし、果たして、落ち着いた自由な研究雰囲気とか、最も重視される基礎教育環境が得られるのだろうか。最近になって、そのことが非常に気がりであると思うのは、何も筆者だけではないだろう。

本学のアイデンティティを貫き通すためには、自由な学問風土を堅持しつつ、何を捨て、何を守り、何を变えていくべきかを的確に判断し、外圧に屈しないことだと思う。ご存知のように、国産ロケットH2やM5の打ち上げ失敗は、我々にいくつかの重要な教訓を与えてくれた。ロケット打ち上げ失敗の大きな要因の一つは、物事の現象を深く思考し、かつ徹底的に理解し得る優れた人材の不足が背景にあるのだ。つくづく思うことだが、大学を改組するのも、新しい建物を建てるのも、新キャンパスを確保するのも、大学が法人化されるのも、それはそれで結構なことだと賛同したいが、自由な学問風土においてしか、優れた人材は育たないのではなからうか。際限なく大学をいじりすぎると、本当に壊れてしまうのではないかと不安になってくる。しばらく大学を自由に放置しておいたらいいのではないか。

(はった なつお

大学院エネルギー科学研究科教授)

カオスの波紋

久野 英二

単純明確な法則に基づきながら複雑で予測困難な結果を生み出す、いわゆる決定論的カオスの発見は、今世紀後半、自然科学界のあちこちで激震をもたらしたようだ。思い起こせば四半世紀前、プリンストンの数理生態学者メイの論文でそれを知ったとき、生物屋である私もいい知れぬ衝撃を受けた。何の変哲もない山型の再生産曲線 - 引き続く2世代間の個体数の関係 - の尖度がある限度を超えると、そこからまるで乱数列のように予測性のない個体数の世代間変動が生み出されるという事実は、要因解析をきちんと進めさえすれば害虫の長期発生予測もおのずと可能になると信じて、無心に昆虫個体数の動態を研究していた私の常識を根底から揺さぶるのに十分だった。生態研究の中で数理モデルの意義を考えるスタンスも、これを境に大きく変わった。

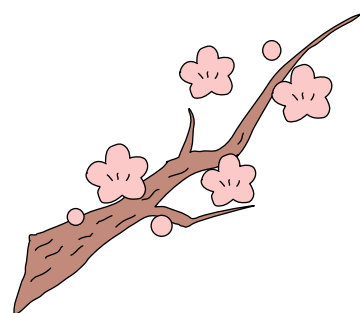
この論文でもう一つショックだったのは、メイがここで使った単純なモデルが、その20年も前に内田俊郎名誉教授はじめ京大農学部諸先輩が、昆虫個体群動態の解析のために世界に先駆けて開発・適用してきた、おなじみのものだったことである。実際に、学生時代の私自身も卒業研究で同型のモデルを使っていたのだった。条件によってこのモデルから個体数の周期振動が導かれることまでは、当時も分かっていたのだが、その一歩先、生物学の常識の枠

をほんの少し超えたパラメータ条件のところに破天荒なカオス原理が潜んでいようなどとは、誰一人想像もできなかったのである。後年ひとりメイがこれに気づいたのは、あるいは彼が物理学出身で生物学の常識枠を意識せずに解析を進められたせいかもしれない。「うーん、してやられた」というのが正直な感想だった。

コロンプスの卵といわれるだろうが、その頃に、もし慧眼といたずら心を兼ね備えた誰かがあとほんの一步踏み込んでこの奇妙な変動則に気づいていたら、50年代、かの気象学者ローレンツの発見に先立つこと数年のこの時期に、京大から世界に向かってカオスの発見を発信できていたのではないかと、などといついつい夢想してしまう。

カオスをめぐるこの経緯は二つの教訓を含んでいるように思う。第一は、科学における大発見の芽は時に思わぬ近場に何気なく潜んでいるものだということ、第二は、それをめざとく掘り起こすには専門領域の枠を超えた自由な発想と無駄を恐れぬ遊び心が不可欠だということである。柳の下にもうこんなドジョウは滅多にいないかもしれないが、あらためてこれを若い研究者諸氏へのメッセージとしたい。

(くの えいじ 大学院農学研究科教授)



資料

平成11年度教育実習実施状況

教育実習は教育職員免許法により、3単位の修得が義務づけられている。本学では事前指導として、実習参加学生に対して例年5月上旬にオリエンテーションを2日間行い（教育実習一般、民族教育、障害者教育、同和教育）、さらに各教科別に具体的な事前指導を行って教育実習に臨ませている。本学では附属学校を有していないため、教育実習は原則として学生の出身校（高等学校、中学校の何れも可）の協力を得て行っている。ただし、出身校で承諾を得られない場合には京都市立学校に依頼して実施している。

教育実習は5月上旬から11月中旬までの間に2週間が充てられ、全体の実習が終了した後、各教科別の事後指導が行われる。

単位認定は、教育実習校からの「教育実習成績報告票」、実習生が提出する「教育実習ノート」と事前及び事後指導の評価を勘案して教育学部において行われる。

平成11年度においては、全国34都道府県の国公私立高等学校108校、中学校25校、養護学校3校の協力を得て実施した。

なお、本年度の特徴としては、中学校普通免許状の取得希望者に義務づけられた「介護等体験」制度（平成10年度入学学生以降から適用され、京都大学では2回生から実施）の運用が全国的に開始されたことである。これにより、折衝すべき窓口は大幅に拡大し、来年度はさらに規模が拡大することが予想される。

また、中学校免許状取得希望学生の把握が困難であるため、教育実習及び介護等体験を円滑に運営するには、各学部・研究科の協力がこれまで以上に重要となってくると考えられる。

関係各位のご理解と一層のご協力をいただき、制度運営にあたりたい。

1. 学部、研究科別実習実施校（京都市立校及び出身校）

区 分	学 部 ・ 研 究 科												計
	総合人間	文	教	法	経	理	薬	工	農	人間・環境	情 報	生 命	
参 加 申 込 者	11	(5)11 50	(2)2 32	(1) 4		(12) 46		(6)11 19	(13) 34	(7) 7	(1) 1	(1) 1	(48)4 214
京都市立中・高校		2											2
京都市立養護学校			4										4
京都市立学校実習終了者		2	4										6
出身中・高校等	11	48	28	4	3	46	6	19	34	7	1	1	208
取 り 止 め 者	2	1	(1)2			1	1	(1)1	1	(1)1			(3)10
出身中・高校等実習終了者	9	47	26	4	3	45	5	18	33	6	1	1	198
実 習 終 了 者	9	(5)11 49	(1)2 30	(1) 4		(12) 45		(5)11 18	(13) 33	(6) 6	(1) 1	(1) 1	(45)4 204

（注）枠内の（ ）は大学院生数，〔 〕は科目等履修生数でいずれも内数。

2. 校種別実施状況

区 分	学 部 ・ 研 究 科												計
	総合人間	文	教	法	経	理	薬	工	農	人間・環境	情 報	生 命	
中 学 校	2	4	9	2		5		3					25
高 等 学 校	7	45	17	2	3	40	5	15	33	6	1	1	175
養 護 学 校			4										4
合 計	9	49	30	4	3	45	5	18	33	6	1	1	204

（教職教育委員会）

特集

クラブ紹介

アイスホッケー部

京都市の河原町三条に室内スケートリンクが設置され、それが契機となりアイスホッケー部が誕生した。今から66年前の昭和9(1934)年のことである。

当時は、現在とは違い防具も革と竹製でヘルメットさえなかったが、まさしく部員は「氷上の青春」を謳歌していた。関西学生リーグで優勝し、全日本学生選手権大会でベスト8に入るなど輝かしい成績も残している。

第二次世界大戦の影響でアイスホッケー部の活動は中断したが、10年の苦節を乗り越え、昭和28(1953)年に再建された。

練習場は、京都市内のアリーナを利用してきたが、スケート愛好者の減少による廃業や騒音に対する近隣住民の苦情による使用時間制限などによって、練習場を転々とせざるを得ず、昭和63(1988)年からは、高槻市のO2スケートリンクがホームリンクとなった。

クラブが団体で利用する場合、営業時間終了後でなければ借用できないため、深夜に練習せざるを得ないアイスホッケー部にとって、遠方のスケートリ

ンクでの練習は大変厳しいものとなっているが、20人の部員は日々練習に励んでいる。

「氷球」や「氷上ホッケー」とロマン溢れる名称で呼ばれていたこともあるアイスホッケーは、氷上の格闘技といってもよいほど大変ハードなものであるが、1チーム6人が不安定な氷の上でゴールを競う魅力あるスポーツである。

現在、3部ある関西リーグの2部の中位を彷徨しているが、元は1部リーグの常連校であった。平成14(2002)年には、西京極に室内リンクが完成する予定であり、これを励みに、いち早く1部リーグに復帰し、新たな黄金時代を築けるよう、部員一同、果敢に挑戦している。

なお、第30次南極観測隊長であった江尻全機氏(昭和40年卒業)は、アイスホッケー部のOBである。

現在のアイスホッケー部の部長は、大学院生命科学科の熊谷英彦教授であり、同部のOB(昭和39年卒業)である。



関西リーグ戦(白のユニホームが京大)

お知らせ

全学共通科目電子掲示板情報のインターネットでの閲覧について

平成12年4月からインターネットのホームページで、休講通知・補講通知・教室変更・教官変更・授業時間変更・臨時試験通知・学生呼出情報の7つの情報が見られます。(下記参照)

このホームページは、京都大学公式ホームページの「学内掲示板」からアクセスして「全学共通科目掲示板」をクリックすると見られます。

なお、このホームページは一般のプロバイダーからは見られません。京都大学内のサーバ経由でしか見ることができません。

自宅のパソコンから見るには、京都大学内のサーバにダイヤルアップ接続してアクセスしてください。

全学共通科目掲示板

